

20054

急性下肢動脈閉塞を来した患者に対し OCT を用いて判断した一例

患者は 59 歳女性。左鎖骨下動脈狭窄症を来し PTA 目的で入院。3 月 6 日、Rt-Femoral approach にて PTA 施行し、止血に Angio-Seal STS Plus (ST. JUDE MEDICAL 社製) を使用し終了となった。しかし後日、急激な右下肢の ABI 低下 (0.69) を認めたため、3 月 10 日下肢 Angio を施行し Rt-CFA に 90% の病変を確認した。IVUS (Eagle Eye Platinum) にて確認したところ不明瞭であったため、更に OCT (Dragonfly JP) を用いて診断をした結果、3 月 6 日使用した Angio-Seal の Anchor 近位部に、血栓を有していることが確認された。

治療内容は Filtrap ϕ 6.5mm を Rt-SFA に留置、SHIDEN 5.0mm \times 20mm、6.0mm \times 20mm にて POBA し Eliminate で血栓吸引を行い、さらに POBA し造影上にて血流改善を確認したため、治療を終了した。経過は良好で ABI 1.0 以上を維持しており、1 週間の入院にて軽快退院した。

今症例では、IVUS と OCT の 2 つの方法で血管内の評価を行い、その見え方の違いを確認することができた。IVUS では Anchor を確認することが出来る程度であるが、OCT は Anchor の形まで鮮明に情報を得られた。今後は、状況に応じた症例ごとの使い分けを検討する必要があると感じた。